

平成29年度

胆振の研究活動

研修部副部長

室蘭市立海陽小学校

校長 林 暁 宏

1. はじめに

胆振管内校長会第7期の研究も2年目に入った。今年度は、研究大会において、昨年度に引き続き「校長会としての取組」と「小中連携しての取組」という2つの明確な視点の設定に加え、全員が持ち寄るレポートも、各研究領域ごとに2つの視点から考えられる「校長の責務」について箇条書きで記述する形をとるなど、ぎりぎりまで焦点を絞って情報交流を図り、課題解決の方策と成果の積み上げをチーム胆振として共有し、小中が連携して学校改善を進めていくことを目指している。



2. 研究計画

(1) 活動方針

教育基本法や学習指導要領の理念と管内校長会の基本姿勢・活動方針を生かし、教育改革への課題解決と創意ある学校経営を目指す校長の在り方を求める。そのために校長会の絆を一層強めるとともに研修と実践を強化しながら、各学校が地域の期待に応え、信頼される学校づくりを推進することに寄与する。

(2) 基本主題

「新たな時代を切り拓き 共に支え合い 生き抜く力の育成を目指す学校教育の推進」
～全ての児童生徒に確かな学びの力を身に付けさせるチーム胆振としての学校改善～

(3) 本年度の研究推進

- ①第7期研究計画（5か年継続研究）の2年次として、昨年度の研究の成果と課題を踏まえつつ、より実践的且つ具体的な形で研究課題の解明に努める。
- ②第17回胆振管内校長会教育研究大会を会員各位の理解と協力を得ながら開催し、研究を深めるとともに、その成果を各校の学校経営に反映させていく。
 - ・3領域の視点毎に6つの分科会を設定し、提言をもとに「校長の責務」についての課題を一層明確にする。
 - ・第7期研究の重点である「校長会としての取組」と「小中連携しての取組」の協議を深めるために、各年度の胆振の現状や課題に即して研修部で「提言の内容」と「協議の柱」を設定する。
 - ・分科会毎に小中合同の2つの分散会を設定し、提言に対する協議及び情報交流を行う。
 - ・提言、司会、記録及び研究集録作成にかかる業務を各市町に割り当て、全員が参加する形での研究大会とする。
- ③全連小や道小、全日中や道中、各市町校長会との連携を密にし、一貫性のある教育研究の推進を図るとともに、研究成果の環流・交流に努める。
- ④管内研修部長研修会を通して研究の推進と交流を図り、管内教育の情報交流に努める。

3. 研究活動

【第17回胆振管内校長会教育研究大会】

〈期 日〉 平成29年8月10日（木）

〈会 場〉 登別万世閣

〈開催内容〉

○基調報告 「古くて新しい学びへのパラダイムシフトと校長の矜持」
胆振管内校長会研修部長 渋川 賢一（厚真町立厚真中学校）

○分科会

〔第1分科会 教育課程〕

- ・提言題 伊達市における小中連携を通しての学力向上対策の推進と取組について
- ・提言者 加藤 久司（伊達市立大滝小学校）

〔第2分科会 教育課程〕

- ・提言題 苫小牧市における小中学校間の連携を踏まえた学校経営
- ・提言者 高城 哲（苫小牧市立明德小学校）

〔第3分科会 組織・運営〕

- ・提言題 全ての児童にとって居心地のいい学校づくりを進める協働体制の確立と校長の指導性について
- ・提言者 前田 仁志（室蘭市立水元小学校）

〔第4分科会 組織・運営〕

- ・提言題 登別市の方針・施策・事業（小・中連携）の取組を通じた学校経営と校長の責務
- ・提言者 嶋原 洋二（登別市立鷺別中学校）

〔第5分科会 家庭・地域・関係機関との連携〕

- ・提言題 室蘭市における小中連携型のコミュニティ・スクールの導入に向けた取組
- ・提言者 高見 恭介（室蘭市立室蘭西中学校）

〔第6分科会 家庭・地域・関係機関との連携〕

- ・提言題 評価を活かした学校改善の取組と小中連携
- ・提言者 栗田 真（豊浦町立大岸小学校）

○記念講演会 ・講演題「組織マネジメントのヒント」
・講師 札幌家庭裁判所家事調停委員（元アサヒ飲料（株）北海道支社特別顧問） 武田 充広氏

4. おわりに

チーム胆振校長会としての機能を充実させることを目指して取り組んでいる本研究も、2年次では研究の視点を一層明確にし、各自の取組をより具体的な形で交流することによってより実践的な研究活動となり、現在の情勢と今後の方向性を的確にとらえ校長の責務を果たすという観点から着実な前進を図ることができた。

コミュニティ・スクールをはじめ、胆振管内の全市町において待ったなしの教育改善にかかる取組が進められている。どの場面においても、校長の経営方針やビジョン等が厳しく問われることとなる。

何を、どのように、どの程度「子どもたちのために」取組を進めるのかを明確に提示できるようにするため、この第7期研究が、情報収集の場となり一人一人が高みへ向かうための手がかりとなって機能することを今後も目指していきたいと考える。